【ユンシス】
横断山脈
研究会
会報

No.〔2013〕
015
2013年3月30日

YunXiSi

■目次

1 Shaluli Shan〔Gangga Massif〕
沙魯里山〔岡嘎山群〕
Gongkala Shan〔Kawarori Massif〕
工卡拉山〔卡洼洛日山塊〕

6 チベットの神秘の河
——深い浸食の国
陸の孤島「幻の山塊」
［中村　保］

18 雀児山の登山記録
（2012年7月～8月）
［松山峰子］

雀児山の登山記録（2012年7月～8月）

松山峰子

はじめに

高峰登山の愛好者として、中国におけるガイド登山の現状を報告したい。まず、中国における登山の背景に少し触れておこう。

私は中国・横断山脈の南に位置する雲南省の出身であり、山が身近にあり山登りが好きだった。大学時代の夏休みや冬休みは、山好きなメンバーを集めて、ロープウェイがまだなかった山岳名勝地の泰山・黄山・廬山などに登り、山の美しさ、自然の尊さ、青春の尽きないエネルギーを教わった。

だが、これはレジャーであり登山ではなかった。当時の登山は国家主導の政治活動であり、偉大な政治任務を果たす職業として、登山家の仕事であった。

1979年、中国政府は外国が長年要請してきた山の解禁を実施し、海外との文化交流の一環として、エベレスト・シシャパンマ・ムスターグ-アタ・コングール、コングールチュビエ・ボゴダ・ミニヤ-コンカ・マムネマチンの８座の山峰が対外開放された。

その後、以前の職業登山家たちは外国の登山隊の連絡役を果たし、後の中国の登山界の錚々たる登山官僚となった。

1999年から、凄まじい中国の経済力向上と国民生活水準のアップにより、大衆レジャーは活況を呈している。全国各地にアウトドア産業が開花し、高山探検やガイド登山が雨後の竹の子のように増え、夢のエベレストも身近な山となってきた。

1999年に、中国登山協会・中国登山隊に所属する王勇峰と馬欣祥が率先的に初のガイド登山ツアーを試みた。テストに選んだ山は青海省の玉珠峰（6178m）であった。同年、中国の高山探険に従事する人員を養成する目的でチベット登山学校が設立された。2001年、チベット聖山探検会社が正式に成立し、中国で初の高山探検ビジネスモデルを確立。同探検会社は、毎年海抜7000mから8000m以上の高峰ガイド登山をメインに主催し、高峰登山ビジネスをほぼ独占した。他方、地方では多種多様な探検倶楽部が林立するようになり、経験や資質をもとに3500m～6000mの山峰をガイド登山の対象にしている。

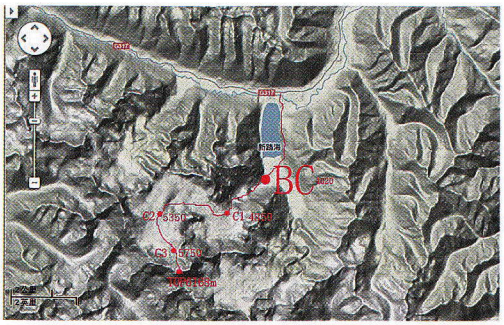
ガイド登山の登場で、中国の登山は国家行為から民間へと転換でき、プロのキャリア登山からプロ・アマチュアの商業提携行為へと変わり、また政治任務から娯楽ビジネスへと変身を遂げたのである。

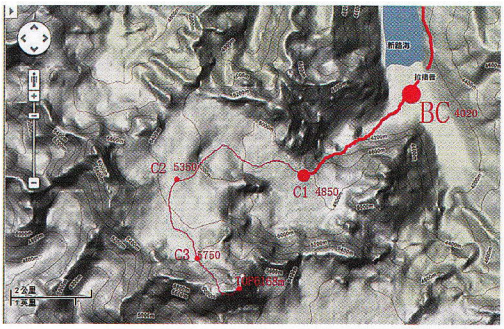
このガイド登山報告は、2012年７月26日から８月８日まで、四川省徳格県にある雀児山（6168m）の登攀記録である。中国における高山探検の、ガイドツアーの実態の一例として紹介したい。

山峰紹介

雀児山は、チベット高原南東部の沙魯里山系の北部、四川省甘孜チベット族自治州の徳格県に聳えている。四川チベット語では、「雄鷹も飛び越えられない峰」という意味であり、東経 99.1°、北緯 31.8° に位置し、雀児山山脈の南部にある。

雀児山主峰は山体が雄大で、地形は複雑な変化に富み、氷河が発達している。とくに、C1からC2までの間に広く長く横たわる氷河は、中国国内でもっとも壮観で美しいものである。その主峰（6168m）の周囲には5000m以上のピークが20座以上あり、常に巍峨壮麗の姿で悠々と雲の上に聳え立っている。雀児山の麓に「玉隆拉措」という美しい氷河湖があり、周辺は豊富な動植物資源に恵まれて、中





雀児山と氷河湖

国省級レベルの自然保護区として指定されている。

雀児山は気候変化が激しく、地形も変化に富んでいる。山麓の入山ルートの左右に、2本の巨大氷河が4600mの中腹まで流れ下っている。頂上までのルートは、大量の氷壁、氷溝、断崖絶壁、クレバス、ヒドンクレバスが縦横にあり、セラックやスノーブリッジも分布し、危険に満ちて高度な登攀技術が求められる。

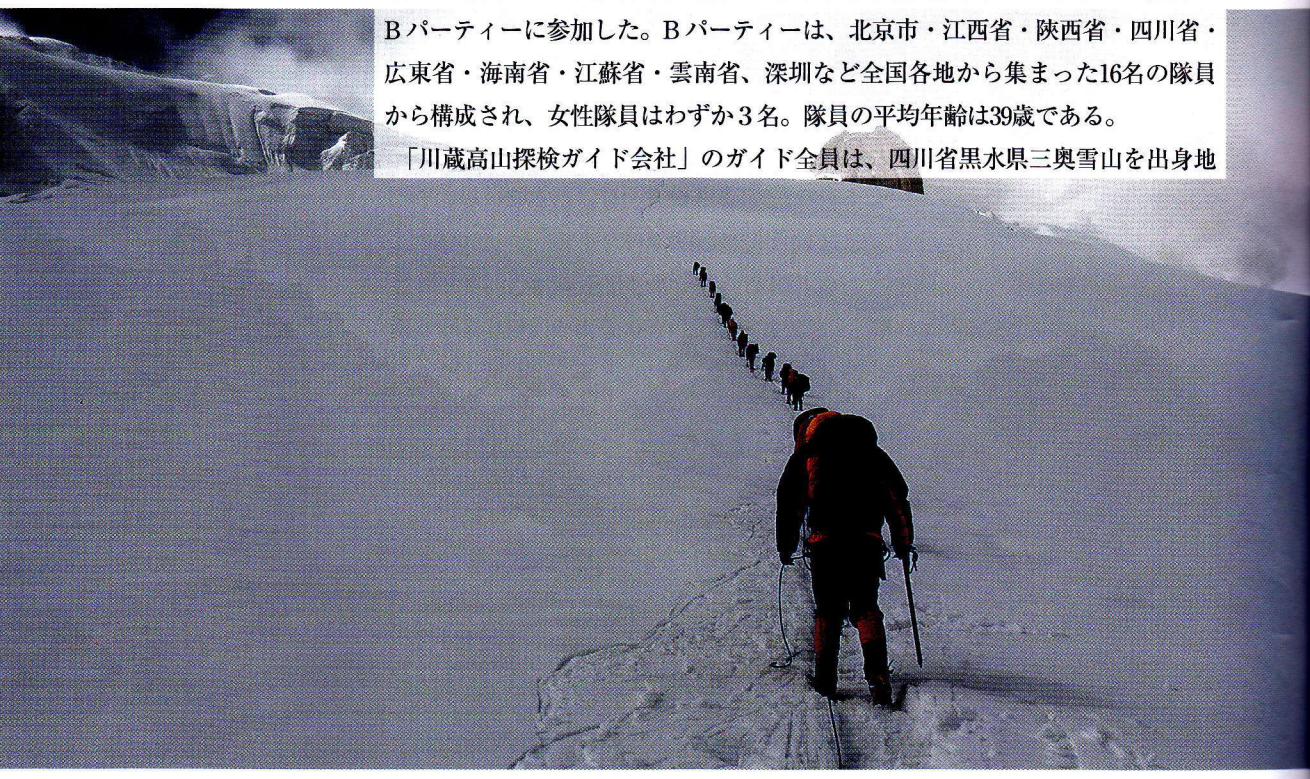
登攀史

1988年9月24日～25日、神戸大学と中国地質大学の合同登山隊に初登頂されてから、1997年にイギリス人のMick Fowlerのソロ登攀に続いて、三回目は2002年8月に2名の韓国人による登頂だった。2003年、中国の「四川刄脊登山隊」が伝統的なルートを再度登頂して豊富な登攀資料を残し、毎年数十チームを迎えるようになった。2012年の8月に参加したものは「川藏高山向導協作隊」という探検会社の主催で、4パーティーに分けて、合計70人以上のメンバーが登頂を果たした。

私は2007年の10月に同山のC2（5350m）まで登ったが、C3（5800m）からアタックルートに跨る大きなスノーブリッジの崩壊により、全員登頂を断念した。その痛恨な思いから、敢えて5年越しの二回目の登攀を決断したのである。

2012年7月27日～8月8日までの12日の間、四川省成都に事務所を構える「川蔵高山探検ガイド会社」（中国語で“川藏高山向導協作隊”）が主催する公募隊のBパーティーに参加した。Bパーティーは、北京市・江西省・陝西省・四川省・広東省・海南省・江蘇省・雲南省、深圳など全国各地から集まった16名の隊員から構成され、女性隊員はわずか3名。隊員の平均年齢は39歳である。

「川蔵高山探検ガイド会社」のガイド全員は、四川省黒水県三奥雪山を出身地



とする土着のチベット族から構成され、国家高山探検ガイド資格を持つ豊かな経験と行き届いたサービスで、中国ガイド登山の業界では大変評判のよい会社である。

料金プラン

特別パーティー

料金：18,000元（日本円で25万円ぐらい）

①ガイド対隊員比率＝１：１体制

②全行程　軽装（荷物はポーター任せ）

③成都から全行程の費用（宿泊代・食費・共同物資・登録料・環境保護費・交通費・コーチ費・協働費用・リード費・ガイド費・ポーター費・撮影費・運搬料・訓練費込み）

標準パーティー

料金：13,000元（日本円で20万円弱）

①ガイド対隊員比率＝１：２体制

②全行程　負荷

③成都から全行程の費用（宿泊代・食費・共同物資・登録料・環境保護費・交通費・コーチ費・協働費用・リード費・ガイド費・分担費・撮影費・運搬料・訓練費込み）

準自主パーティー

料金：甘孜県から9,000元（日本円で15万円弱）

①ガイド対隊員比率＝１：３体制

②全行程　荷物・装備を自力で背負う

③甘孜県（集合地）から甘孜県（解散地）まで全行程の費用（宿泊代・食費・共同物資・登録料・環境保護費・交通費・コーチ費・協働費用・リード費・ガイド費・分担費・撮影費・運搬料・訓練費込み）

個人装備一式貸出し料：個人装備を所有しないメンバーには、500元（日本円で6,500円）で必須な装備が一式レンタルできる。

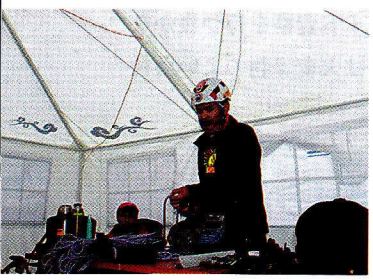
貸出し用装備には、以下のものが含まれている：登山靴・アイゼン・ピッケル・ハーネス・ダイナミックロープ／スタティックロープ・ユマール・エイト環・カラビナ（２枚）・ヘルメット

行程スケジュール

１日目　成都―雅安―二郎山―康定

２日目　康定―甘孜

３日目　甘孜―馬尼干戈―新路海…白鹿自然保護区にBC（大本営＝海抜4020m）


登山技術の講習（BC）

4日目　BCで順応訓練、氷雪技術訓練、安全確保訓練、救援技術訓練、環境常識などの講義を、主催側の隊長から受ける
5日目　BC（4020m）…C1（4850m）
6日目　C1（4850m）…C2（5350m）
7日目　C2（5350m）…C3（5750m）
8日目　C3（5750m）…アタック（6168m）…C3
9日目　C3…BC
10日目　BC―炉霍
11日目　炉霍―成都
12日目　天候の変化や隊員の体調調整に、あらかじめ1～2日の予備日が用意される

行動日誌

7月24日【成田⇒浦東⇒成都（505m）】

成田から上海の浦東国際空港までは、時間どおりで順調に着いたが、浦東から成都まで乗換えの手続きが済んでから、搭乗口で飛行定刻より遅れ、4時間以上も待たされた。当日の21：30に成都の双流国際空港に着くはずの飛行機は、けっきょく25日の早朝2：30過ぎの到着となった。落ち着かない、なんだか大変疲れた1日だった。

7月25日～26日【成都】晴れ

成都に着いて、自分が申し込んだ25日出発のBパーティーは、Aパーティーの事情調整により、28日に変更されたのを知らされ愕然。登攀スケジュールに合わせて入念に捻出した期間は、いきなり二日間もずれ込んで茫然。計画が乱れ、宿泊のホテルでダラダラ。やることを整理して、街に出てブラブラ。現地で使う携帯電話を購入。「体力をつけなくちゃ」と思い、火鍋の店で四川料理を一人で大食い。山に入ったら、しばらく入浴できないと思い、タクシーの運転手さんに評判のいい健康ランドへ行ってもらう。薬草混じりのミルク浴に浸ったあと、全身マッサージを施してもらった。身体の満足は、精神の不満を多少癒してくれたようでよかった。

1：7月27日【探検会社にメンバー集合・会議】晴れ

登山活動が正式にスタートする第一日目で、まる一日を隊員集合の日に割り当てられた。朝から晩まで、初対面のメンバー達が次から次へ探検会社のオフィスに集合。社長の蘇拉さんと助手の奥さんは二人ともチベット族で、暖かく親切にみんなを迎え、登山事項や関連書類の確認とサインを済ませ、個人装備の最終チェックなどをして終了。翌朝、貸切りバスの出発が早いため、早めに就

寝した。

2：7月28日【成都―雅安―二朗山―康定（2616m）走行距離＝322km】曇り

入山の道は、一年中道路の寸断と復旧作業を繰り返し、車両の通過には常に時間規制が行なわれている。悪状況で名高い道なので、車両数の少ない早朝を狙って朝6時半に出発した。朝食は成都市を抜けてから、沿線の小さな店で肉饅頭・お粥・ラーメンで済ます。早朝出発が功を奏し、道路規制にほとんど引っかからず、順調に成都―雅安―二朗山―康定へと道程を稼ぐことができた。みんなで食事をしていた昼ごろ、交通規制で後続のバスが難航している連絡が入った。改めて、早く出発してよかったと実感した。午後5時ごろ、予定どおりに海抜2616mの康定の宿泊ホテルに到着した。バスに酔ったせいか、高所障害の初期反応なのか、食欲がまったくない。夕飯の時に、食卓を囲んだ隊員達に挨拶して食卓を去ったあと、ホテルの裏にある庭で急な吐き気を催してきて、高所障害の初期症状がついに出たと覚悟し始める。よく考えたら、Bパーティー16人の中では私が一番小柄で、そのうえ一番年長でもある。心配されるのも当然。ほかの隊員は、ほとんど30代前後でみんな元気モリモリ。40代の私は、日本の山仲間では一番若いのに、中国に来たら何と一番年長者になってしまう現実にちょっとショック。中国の恐ろしさを改めて感じた。

3：7月29日【康定―甘孜（3394m）走行距離＝392km】晴れ

今日は時間に余裕があるので、朝9時と遅めの出発。午後5時頃、海抜3394mの甘孜に到着する。宿泊のホテルは、お湯どころか水も出ない。郊外なので、夕飯後に隊員達と町に行って散策しながら見物し、日が暮れる前にホテルへ戻り、早めの就寝にした。

4：7月30日【甘孜―馬尼幹戈―新路海…BC（4020m）】晴れ

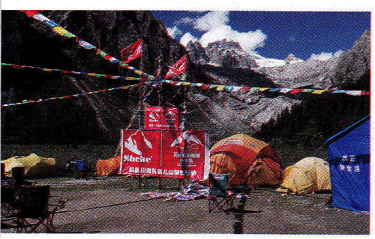
今日の走行距離は短かったので、昼12：00頃馬尼幹戈で昼飯を済ませ、14：00頃玄関にあたる新路海に到着。ここからは、順応トレーニングを兼ねて徒歩でBCに向かう。夏季の増水で、湖畔のトレールは水没しているところが多く、山に登って迂回し、高山植物が咲き乱れた山道を2時間歩く。16：00頃、氷河の舌端下方に開けた平坦地のBCに到着した。待機しているガイド達の熱烈な歓迎を受けた。美味しい晩御飯は夜の雰囲気を一層楽しくさせた。ここに着いてから、隊員達は全員興奮気味で、戦闘モードに切り替わったような気がする。

アプローチ

5：7月31日【BC（4020m）で一日調整】雨

朝、目が覚めると一晩で目や顔が腫れてきて、ついに高山病の症状が出た。鏡をみると顔に浮腫があり、小さな目はさらに小さくなり悲惨な姿。症状に少

BCに集合した隊員



ガイド会社のディスプレー

確保技術の講習会

し不安を感じる。食欲もない。一日３食はほとんどお粥とザーサイで賄った。午後に天気が崩れ、雨が降り出した。室外で隊員全員に行なっていた登山技術の講習会を、途中でテント内に移して行なった。雨が止んでから、実践トレーニングをBC付近の空き地で行なった。講習内容は、ロープワーク・氷雪歩行技術・登攀技術・安全確保技術・救援技術・環境保護の意識などである。最後に、我がチームの隊長を務める三基木というリーダーガイドが隊員に紹介された。たいへん優秀なガイドで、2007年の一度目の雀児山、2008年のムスターグ・アタと2010年の四姑娘三峰の旅でもお世話になった。私と縁が深い方で、精神的になぜかホッとした。明日の準備を整え、汶川大地震震災用の20人収容できる大きなテントの中で、全員期待感を高めながらワクワク就寝した。

６：８月１日【BC (4020m) …C1 (4850m)】雨

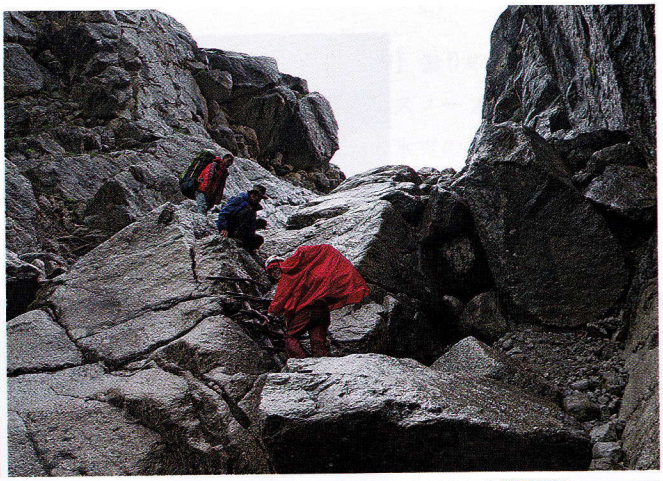
BCからC1までの難所は、約30度の勾配がある小石のガレと高さ５ｍのテーブル二段。滑りやすい草薮の傾斜地がつづき、40～60度の勾配があるガレ場を落

石に神経を使いながら登ることである。C1はスノーラインになり、氷河の末端でもある。

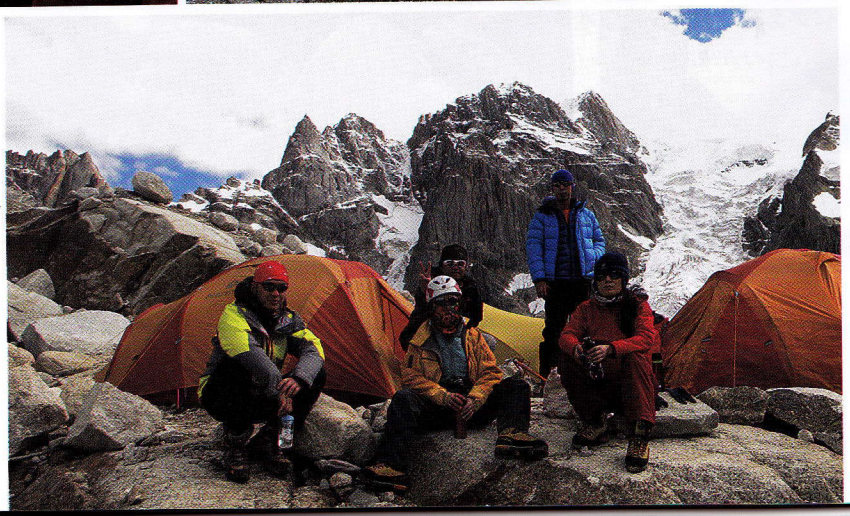
この日は登攀をスタートする初日だ。あいにく天気はすぐれず、朝からずっと小雨。朝食後、隊長からC1へ登高の指令が出され、全員異議なく出発態勢を整えた。高山病で連日まともに食事を取れなかった私は、悪天候に今後の体力温存のため、重い装備を詰め込んでいるザックをポーターに有料で頼んで、食料・水と防寒着を詰めた軽装なザックで隊員たちと出発した。雨が止まないため、途中の休憩は逆に体温が奪われ寒くなる。隊員達はほとんど休憩せず、通常5～6時間をかけて14:00頃到着する距離を、なんと一気に3時間で到着した(12:00頃)。ガイド会社は、この日の隊員達の体力の強弱を見計らって、チームをその後3チーム編成に変更した。初日、初心者の1名は完全に脱落して自ら撤退を宣言し、翌日BCに戻って早期に帰郷となった。

この日は天気が好転せず、雨ときどき曇り。周りの景色がいっこうに見えない。私の体調も天気同様に好転せず、昼食は胃袋が拒否状態。午後、隊員全員で近くのスノーラインにある岩場と雪原で、氷雪歩行技術・登攀技術・安全確保技術・救援技術などの実習トレーニングを、体調が悪くても無理して参加した。2007年の時とほぼ同じ内容だった。

夕飯はインスタント春雨を少し食べたが、食欲がない。この優れない天候と優れない体調に圧倒されながら、不安な一夜を過ごした。



左上＝C1はモレーンと氷河の境目にある
右上＝C1へのルート



C1でくつろぐ

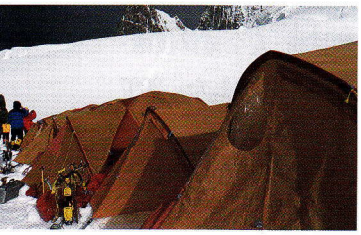
7：8月2日【C1（4850m）…C2（5350m）】晴れ

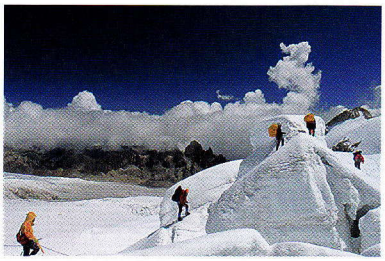
C1からC2までの難関は、約40〜50度の勾配がある氷雪の斜面と乱氷区。そして、無数のクレバスを通過することである。2008年5月に起きた汶川大地震の影響で、クレバスの数と裂け口は明らかに大きく変化した。ルートは地震前よりさらに複雑になり、難しくなったとガイド達が言う。

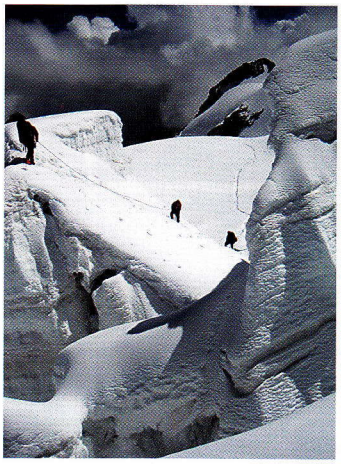
今日はスケジュールどおりに朝7時起床、8時出発。雨は見事に止み、天候好転の兆しが訪れる。周りが着々と出発の準備を整えた。しかし、私は激しい嘔吐に襲われ、周りの隊員達は黙って見守る。どうしよう。ここで敗退か？
C1のテントで一人様子見よりは、とりあえず空腹でも出発しようと腹を決めた。隊長と相談して、みんなの迷惑にならないよう、最後尾で出発することにしてもらった。

C1からC2の間に、クレバス・ヒドンクレバス・ブリッジが縦横に走り、多くのセラックもあって、神経を使い気を引き締め登ったり渡ったりしている間に調子が好転し始めた。最後尾であっても、大きな遅れを取ることなく、順調にC2に辿り着くことができた。

夕飯はインスタントラーメン・インスタント春雨・インスタントご飯の三つの選択肢があり、この単純なメニューはBCに戻るまでずっと続いた。辛味風味のインスタント春雨は食欲を誘い、大盛りで食べた。元気をだいぶ取り戻したような気がする。


C2





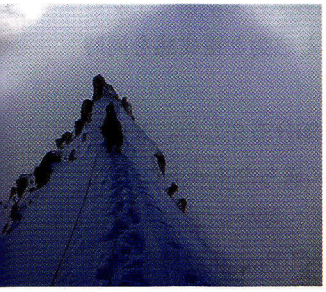
C2からC3への途中で（3枚とも）

8：8月3日【C2（5350m）…C3（5750m）】晴れ

C2からC3までは懸垂氷河のルート。アップダウンが激しく、約60～70度の勾配がある高さ約15mの氷壁を登るのがいちばん辛かった。C3まで約4時間かかる。

この日はいちばん元気な朝を迎えた。2007年に足を止めた地点から前進できそう。ちょっと嬉しい。いい天気に恵まれ、C3までの距離が短いため遅めの出発となった。前日の食事をきちんと取ったせいか、この日は楽しい気分で登山をエンジョイすることができた。登る時間は十分あったので、落ち着いて登ることができた。C3に到着した時は、すでにテントでくつろいでいる隊員がいた。三人の女性隊員は二人用のテントで泊まるので、真ん中の私は一睡もできなかった。理由は設営の粗末さが原因だった。きっと、設営するときにきちんと整地しなかったと思う。腰あたりは盛り上がり、しかも微妙に前傾している。常に両足で支えないと寝袋と一緒に徐々に下へ滑って落ちる。両サイドの隊員を起こさないよう、最大の努力で動きを最小限に抑え、結果として未明まで睡眠不足で、持病の偏頭痛を誘発し、再び嘔吐と無力に陥った。悔しくてならない。アタックは数時間後に迫ってきたのに。一人テントで頭痛に苦しめられながら、アタックの準備に慌てて取りかかった。隊員のアタックの帰りを待つより、痛み止めを飲んで同行するほうがいいからだ。このとき、カメラをテントの隅に忘れる痛恨のミスを犯してしまった。けっきょく頂上に立った写真は隊員に撮ってもらったが、自分のカメラで頂上を記録することができなかった。

ナイフリッジから頂上へ


ナイフリッジを登りきると頂上

9：8月4日【C3（5750m）…登頂（6168m）…BC（4020m）】曇りのち晴れ

C3から頂上までは難関が連続する。2007年に崩れたスノーブリッジが巨大な溝になった場所をアルミ梯子で通過後、高さ約10mの氷雪の斜面を登り、さらに約60～70度の勾配、高さ約60mの氷壁を登りきる。そして、幅30cmのナイフリッジの稜線を20m渡って絶頂に辿り着くのである。

この日は、持病の偏頭痛の誘発でアタックに自信喪失。テントで見守るしかない自分を、許せないもう一人の自分がいて、迷わず鎮痛剤を飲んだ。未明3時起床、アタックを迎える。配られた行動食をサミットザックに入れ、朝食は取らず4時にヘッドライトをつけて出発。暗闇の雪原を、前の隊員の足跡をひたすら辿り頂上をめざす。ライトの光を頼りに、アルミ梯子を通過。大きな坂を登り越え、長い氷雪の坂道を通り抜けたら、巨大な氷壁が目の前に聳えていた。氷壁のトップは雲で覆われていて、頂上は見えない。6：40ぐらいに、隊員が全員並んで氷壁に二本のフィックスロープを頼りに、アイゼンとピッケルで氷壁を必死で登っていく。隊員達は見えない頂上に消え、私も必死でアイゼンを蹴り込みピッケルを抉り込んで、氷壁に一歩一歩距離を稼いでいく。呼吸がどんどん荒くなり、心臓は自分の耳でも聞こえるほど大きな鼓動音がしてきた。あと少し、頑張れ。やっと氷壁の向こうの絶景が見えて、頂上に着いたと思っ

雀児山の山頂部

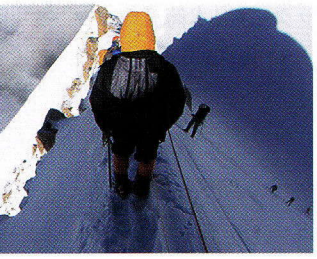
女性隊員三人（左）と
登頂写真（右）

たら、なんと目に前に幅30cmしかないシャープなナイフリッジがあるではないか。足元に未曾有な恐怖を感じながら、20mぐらい慎重に渡って、7：20にとうとう6168mの絶頂に立った！　信じられないことで、その瞬間に、後ろに佛の影を閉じこんだ丸い立派な佛光が燦々と現れた。頂上を一周見渡し、その大自然の絶景に、がんばった自分に、同伴の隊員達に、感動と感謝の気持ちが湧き上がって、思わず万歳のポーズで心の中で叫んだ。頂上で恐怖と感動と達成感を同時に味わった登山は、これが初めての体験だ。

ブロッケン現象

記念写真を撮ったり、歌を歌ったり、抱擁したり、約30分滞在した。天候の変化に配慮して、懸垂下降で下山し始めた。帰りも危険に満ちたルートなので、登りと同じように隊員をグループに分け、ロープで結び下へ向かった。

下山のスケジュールは想像以上にハードなものだった。6168mの頂上から、一気に4020mのBCに戻るからである。14：00頃にBCへ戻れた体力の強い隊員は数


下山開始

名いたが、ほとんどの隊員は16：00から18：00の間にゾロゾロ疲労困憊な姿で戻った。

BCでは、探検会社社長の蘇拉さんとスタッフ達がスイカと美味しい手作り料理をたくさん用意して、隊員たちの登頂を祝ってくれた。夕飯後、ガイド達によるチベットの歌や踊りの披露が祝賀パーティーを飾った。同時に他チームとの交流会も行なった。23：00頃やっと就寝。ものすごく疲れたけど楽しかった。この夜は鼾などを聞く暇、夢を見る暇もなく朝まで熟睡した。

10：8月5日【BC（4020m）—炉霍（3200m）】晴れ

帰途の日なので、朝9時までゆっくり睡眠をとり、昼頃にBCから国道317号までの玄関にあたる新路海まで馬に乗って移動。新路海から貸切りのバスで成都へと向かう。炉霍で一晩宿泊する。隊員達は疲労で、食事と睡眠に夢中状態。みんな早く家に帰りたい。

11：8月6日【炉霍（3200m）—成都（505m）解散】晴れ

9：00、同じ貸切りバスで出発。成都に向かう。17：00過ぎ、成都にある探検会社のオフィスビル前に到着。探検会社社長の蘇拉の奥さんが出迎えてくれた。近所にあるレストランで祝賀会を開く。四川省登山協会が発行する「雀児山登頂証明書」（有料）が配られ、これをもって活動が幕を閉じた。

12：8月7日【予備日。順調だったので、成都で散策】晴れ

個人装備

登山靴・アイゼン・ピッケル・ハーネス・ダイナミックロープ／スタティックロープ・ユマール・エイト環・カラビナ・ヘルメット・高所帽・ゴーグル・ヘッドライト・1000～1400gのダウンシュラフ・マット・ダウンジャケット・防寒下着・

個人装備の総点検

靴下（若干）・防水手袋（2足）・スノーカバー・65L以上のザック・保温水筒・UVカットクリーム・リップクリーム・個人常用薬品・食器など、冬山装備一式

共同装備

高所用テント・炊事テント・共同休憩テント・トイレ用テント・GPS・釜・ガス・薬品・アイスバイル・ロックコーン（岩錐）・アイススクリュー・アイスハンマー・調理器具・刀具ツール・トランシーバー・机・椅子・ビデオカメラなどの器材・メインザイル・アルミ梯子など

食料計画

成都から成都に戻るまでの食品は、探検会社からすべて提供された。BCに専門のコックが常在

主食類：小麦粉・米・ナン（小）・素麺・パン・羊肉・ヤクの肉・鶏肉・豚肉など

インスタント食品類：ラーメン・ご飯・春雨・乾パン・ビスケット・インスタントミート・八宝粥・ハム・ソーセージなど

野菜果物類：ジャガイモ・ニンジン・大根・玉葱・ネギ・ニンニク・トマト・ピーマン・キャベツ・白菜・キュウリ・レタス・サヤインゲン・生姜・リンゴ・ナシ・オレンジ・スイカなど

副食品類：卵・ピータン・塩辛い卵・ベーコン・ソーセージ・ビーフジャーキー・魚ジャーキー・粉ミルク・ヒマワリの種・春雨・昆布・クルミの実・レーズン・ドライアプリコット・無花果・糖・ザーサイ・御新香・カラシみそ・漬け豆腐・ジャム・サンザシのおやつ・ガム・スイカの種など

ドリンク類：粉ブドウ糖・インスタントコーヒー・紅茶・緑茶・コーラ・インスタンドジュース・ゼリー・粉ミルク・蜂蜜など

BCで出される料理

保険

この登攀活動に参加する全員に、参加費込みで「亜美生命保険会社」の50万の生命保険に入る

おわりに

今回のガイド登山は、中国各地で現在行なわれているガイド登山の代表的な一例で、いくつかの問題を指摘しておきたい。

1．ガイド登山は、経験のない人でもお金を払えば、山登りの夢を簡単に叶えてくれる身近な存在である。
2．参加者は経験の有無にかかわらず、体力的に問題なければ、だれでもアウトドアでの活動に参加できる。参加者には山の経験者もいるが、山を初体験の者も数多くいる。
3．経済力によって、手の届く山と届かない山に分かれる。また同じ山でも、経済力によって登山のガイド条件とサービスが違ってくる。
4．隊員は全国から応募してくるため、仲間グループの応募を除いてほとんど初対面である。チームワークや、一本のザイルに命を託すリスクが懸念される。
5．2007年から2012年まで、２回に亘って同じ山での登山活動に参加したが、値段と参加者の両方に大きな変化を感じた。値段は、7,000元（2007年）からほぼ倍の13,000元（2012年）になった。登る人数も倍以上に増えた。2007年の夏と秋はそれぞれ２パーティーの参加者だったが、2012年の夏は４パーティーに増えた。
6．参加者の平均年齢は明らかに若くなる傾向にあり、社会的に若者の生き方や価値観などに大きな影響を与えている。大衆的なアウトドアブーム、とくにエリート層の登山ブームに拍車をかける役割を果たしている。
7．登山ブームに乗った登山人口の激増と、経済力の飛躍による大衆登山時代の到来はもう遠くない。
8．大衆登山時代の到来に備えて、登山意識の啓蒙、登山技術のトレーニング、登山における規制の策定や遭難・救助システムの構築などが急務となる。